

肖像模倣に於ける幼児の個性と注意の研究

神戸幼稚園 森 た よ

一、緒言

幼児の精神や行動を研究しますのに、特にその諸性質、諸作用を分析した上でその簡単な一つ一つを實驗的に研究致しますのは學問上大切な事でありますが、その分析が過ぎますと時には幼児の生活さかけ離れたものとなる場合がありますので、今回試みましたことは實驗の條件としては稍々複雑したものではありませんが、幼稚園に於ける幼児の實際的生活にも重要であり又私達が保育にあつて幼児を指導致します時には非必要な幼児の模倣行爲を問題と致しまして、幼児の個性に注意を見る所の實驗を致して見ました。

二、方法

期日 昭和九年七月

被験者 神戸幼稚園及び神戸愛兒園全幼兒

男兒 一二四名

女兒 一〇六名

男兒には東郷元帥の立像（大阪毎日新聞附録）

女兒には人形を抱いた女の子の立像、を模倣させることに致しまして、それを通じて幼児の氣質性格の一端、注意のはたらしき、注意の廣さ、注意の持續等を伺ひ、それ等を通じて幼児の持つ特性なきを見ることに致しました。

方法は幼児を一人一人實驗の場所へ呼び入れまして、肖像畫の前に起立させ、

「此の繪の通りに眞似して御覽。」

「先生がよろしいと言ふまで、ちつこしてゐるのですよ。」
と言つて、男兒の場合には劍さ帽子を、女兒の場合には人形さ帽子をの前に置いておきました。

實驗する方の人は常に三人で、一人は幼児に説明し、一人は幼児のする事を記録し、一人は幼児の出入りを世話しました。

斯様な方法によつて二回實驗をしました。記録は出来るだけ詳細を期する爲豫じめ印刷して置きました次の如き用紙を用ひ一々の動作を記入致しました。

模倣態度に依る直接的性格調査法 (園)

姓名

實驗日 昭和 年 月 日 時 頃 天候
 生年月日 年 月 日
 満 年 年 月 (觀察者)

真似に掛る時の心構へ (性格觀察)	喜んで 真面目くさつて 何氣なく 恥しがる うれしさがつて笑ふ
	おどけて { いばる / 笑ふ } いやいやで { ぐずぐずする / 逃げる } 拒絶 { 泣く / すねる / 逃げる }
真似する時の行爲 (注意の動き又は深さ)	最初によく見ておいてする 繪を見ては姿勢を直し又見ては直しする
	繪をろくに見もしないで姿勢をとる 繪を見てばかり居て姿勢はろくにとらない
真似した形 (注意の内容又は廣さ)	剣や帽子の方に氣をとられる ぼかんと立つて居る
	頭 正しい 前かゞみ 後へのる 右へかたむく 左へかたむく 上 體 同 同 同 同 同 肩 いからせる すぼめる 眼の方向 繪 眞直前向き きよろきよろする 口 閉 右 手 正 否 左 手 正 否 脚 繪と同じ きなつけの形 脚をひらく 足 繪と同じ きなつけの形 兩足をそろへる 兩足をひらく
形のくずれ方 (注意の持続又は長さ)	(時間) 1 秒 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 頭 眼 上 體 肩 手 脚 足
止める時の行爲 (注意持続のくずれ方)	わき見して場所を動く 先生の方を見て 喋舌る (文句)
止めた時 (注意持続を破る原因)	いやになつたから くだびれたから うれしさかつたかな 定時以上の秒數 何か他に氣を散らす原因があつた(原因)
(注意) 1 此の繪の通りの真似をして御覽。(ゆつくりと充分に姿勢をとらせる) 2 先生がよろしいと言ふまでちつとしてゐるのですよ(時間 15秒まで)	

次にその結果について一々申します

三、結果

記録用紙で豫じめ分類しておきました様に

第一節 眞似にかゝる時の心構へ。

第二節 眞似する時の行爲。

第三節 眞似した形。

第四節 形のくずれ方。

について纏めたのでありますが、私達がそれによつて目的を達した事は、

第一節を通じて幼児の個性(氣質、性格)に關して、

第二節を通じて幼児の注意の作用(はたらき)に關して、

第三節を通じて幼児の注意の内容(廣さ)に關して、

第四節を通じて幼児の注意の持續(長さ)に關して、

少しでも理解を深めやうとした所にあるのであります。

(止める時の行爲を、止めた時々の二項目は今回の整理では省略致しました。)

第一節 眞似にかゝる時の心構へ。(幼児の性格、氣質に

關する調査。)

其の一、實驗に表はれた幼児の態度

平常は極めて朗らかに何のこだわりもなく先生に接してゐる子供でも、さて改めて前に述べました様な實驗の場面に一人で連れて來られますと、氣が改まるでも申しませう

か、餘程異つた態度に出ました。然しその時の態度が子供によつて異りますので、私達は斯る態度を観察することに依つて子供の個性を伺ひ知る一つの手段とすることが出来ると思ひました。それに就いては次の様にして整理をしました。

(一)態度の分け方としては、

(イ)かゝる特殊な環境に消極的な影響を受けずに、課題に従つて行動せるもの

即ち心構への中「喜んで」「何氣なく」「眞面目くさつて」でありまして、それらをまゝめて、「十」なる符號を與へました。

(ロ)環境の消極的な影響は確にあるが、一方課題の遂行さういふ觀念にも支配されて後者の方が、僅かに強く行動を支配せるもの。

即ち心構への中「てれくさがつてする」「恥づかしがつてする」「ぐずぐずしながらする」さういふのであります。まして、これには「土」の符號を與へました。

(ハ)環境による影響が行動を消極的に導く様に働いて課題の實行を阻止せるもの。

心構への中で「ぐずぐずしてやらない。」「いやがつてやらない」「もぢくしてやらない」「拒絶」「すねてしない」「部屋に入らない」等で、これには「一」の符號

を興へました。

第一表 (甲)
第一回、心構へ別百分比

		+	±	-	計 (人数)
長	男	70	27	3	100 (100人)
	女	56	35	9	100 (88人)
幼	男	50	29	21	100 (24人)
	女	44	33	22	100 (18人)

第一表 (乙)
第二回、心構へ別百分比

		+	±	-	計 (人数)
長	男	80	20	0	100 (90人)
	女	63	34	3	100 (73人)
幼	男	67	33	0	100 (18人)
	女	75	17	8	100 (12人)

その表の中で長は年長組、幼は年少組であります。之によつて見ますと、

一、第一回、第二回共に

長は幼よりも「+」が多く、「-」が少い。

男は女よりも「+」が多く、「±」「-」が少い。

二、第一回目よりも第二回目の方が

「+」が著しく増大、「-」が著しく減少してゐます。

三、之を個人別にして考へて見るに、

第一回目には恥づかしがつて、しなかつたが、第二回にはすぐ遂行した者が多く有りました。

その結果は次の第二表であります。

第二表
(191人)

I \ II		+	±	-
II	+	99人 (51.9%)	32人 (16.8%)	7人 (3.7%)
	±	14人 (7.3%)	31人 (16.2%)	5人 (2.6%)
	-	1人 (0.5%)	0 (0%)	2人 (1.0%)

第一回には「+」であり乍ら、第二回目に「±」又は「-」になつた者なきにしもあらずであります。左下方の三區の和が七・八%に對して、右上方の三區の和は二三%でありますから、絶體に多いのであります。

即ち第二回目には、餘程積極的に勵らくやうになつてゐます。實驗の目的がわかつてしまふご安心して動作にかゝるごことによるものご考へられます。然し中でもその傾向は長は幼よりも強く、男は女よりも強いのであります。即ち幼及び女は第二回目でも恥づかしがりが残つてゐるのであります。

(II) 前述の「+」「±」「-」の三つに大別した態度の中で、最も多かつた反應形式を求めてその特徴を上げて見るに次の様であります。

即ち男女、長幼共に「何氣なく」「真面目くさつて」が大部分でそれに「喜んで」が少し加ります。之に依つて見

る普通の性格の幼児は、此實驗に於ては大體平氣ではあるが、それに少し嚴肅な氣持ちが加はつた程度的心構へを持つて課題の遂行に當るものが多い事がわか
ります。

次に「土」「一」の原因となるものは矢張り「恥しがる」
ことゝ「てれくさがる」「こゝが同じ位の程度に多いので
あります。

其二、幼児の性格との相關

扱、斯様にして此の實驗場面で現はれました「十」「土」「一」の三つの態度と幼児の個性とどう關係してゐるだらうか、次にそれについて調査して見ました。

我々の幼稚園では昔から園兒全部に就いて個性調査一覽表を作つてありまして、その情意の部の記録方法をしまし
て、氣質や性格を表はす極平凡な言葉、例へば、「勝氣」、「憶病」、「威張り」、「小心」なきの三十四の言葉を使用し
てそれに當る性質を持つ幼児には、その言葉のところに「○」
印をつけて、幼児の性格を記録してゐるのでありますが、
今その個性一覽表に記録されたもの（即ち平素の觀察によ
る性格の判断）と此の實驗に於て表はされた前の「十」「土」「一」の三種の態度との相關を求めて見ました。これは個人
的に調査しますと非常に面白いのでありますが、今は唯全
體として兩者の相關を求めました所、次の様な結果を得ま

第三表 實驗に於ける態度と個性との相關

(甲) 男 兒

	十		土		一		計	
	數	%	數	%	數	%	數	%
外向性	238	(73.9)	77	(23.9)	7	(2.2)	322	(100)
		53		43.5		35		
内向性	211	(65.1)	100	(30.9)	13	(40)	324	(100)
		47		56.5		65		
	449	100	177	100	20	100		

(乙) 女 兒

	十		土		一		計	
	數	%	數	%	數	%	數	%
外向性	153	(64.6)	83	(35.0)	1	(0.4)	237	(100)
		46.7		40.7		12.5		
内向性	174	(57.7)	121	(40.0)	7	(2.3)	302	(100)
		53.3		59.3		87.5		
	327	100	204	100	8	100		

した。
但し、此處では三十四の性格標語を大體、「淡路」、「岡
部」兩先生御發表の向性検査の質問要項にあてはめて、外
向的なもの十七と、内向的なもの十七とにわち、それと
此の實驗に於て「十」「土」「一」の各々の態度をまつたも
との相關を求めたのであります。
その結果は次の第三表に示されて居ります。

第三表の結果を見るに實驗に於ける態度と性格との間には「十」の相關が認められ特に「一」の態度と内向性との間には著明な相關が認められます。然し「小心」、「憶病」を評價されてゐた幼児でも「十」の態度に出たものもあり、「勝氣」を評價されてゐた幼児でも「一」の態度に出たものもあるのがありますから、此の實驗のみを以て個性を評價するわけには行きませんが相當に信頼性のある觀察が出来ることを知るのであります。殊に此の實驗に於て「一」即ち拒否的に出た幼児は「問題の子供」して「關心を要します」。

女兒の方の結果では、一般に女兒は内向的の性格が見られ、本個性調査表に於ても女兒の記録では内向性の記録が多くなつてゐるこいふ事を念頭に於て見て戴く事を要します。

第二節。眞似する時の行爲。

第二節以下は第一回目の實驗の結果に依らず全部第二回目の實驗の結果にりました。(何となれば、第一回目實驗では實驗に對する心構へが充分できて居ないのが多かつたからであります。)

眞似する時の行爲とは、肖像模倣に掛るべきの注意の配り方、即ち「注意の作用、深さの方面に關する研究であります。

その結果
一、注意のよく行届いたもの

第四表 注意の作用に關する結果

	男		女	
	長	幼	長	幼
注意のよく行届いたもの	(58) 61.05%	(9) 50.00%	(38) 71.70%	(4) 33.33%
輕卒だが注意するもの	(18) 18.95%	(4) 22.22%	(6) 11.32%	(7) 58.33%
注意の散漫なもの	(17) 17.89%	(4) 22.22%	(6) 11.32%	(0) 0%
全然注意しないもの	(2) 2.11%	(1) 5.56%	(3) 5.66%	(1) 8.33%
計	(95) 100%	(18) 100%	(53) 100%	(12) 100%

女、長、幼の別に整理すれば第四表の結果を得ました。

最初繪をよく見ておいて模倣する。
繪を見ては、姿勢をなをし、又見ては直しする。
二、輕卒ではあるが、注意はしてゐるもの。
繪をろく／＼見もしないで、姿勢をさる。
三、注意の散漫なもの。
繪を見てばかりゐて姿勢はろくにさらない。
劍や帽子に氣をさられる。
四、全然注意しないもの。
ボカンとして居る。
繪もろくに見ず姿勢もさらない。

右の結果

一、大體全幼児の五〇%乃至六〇%位までの者はよく注意を働かせて居ります。中で最も多いやり方は「繪を見

ては直し見ては直しする。」ものであります。
二、輕卒なやり方をするものは、男兒よりも女兒に多い。
三、然し又その表の三段目の氣の散りやすい者だけを見

ますと、女兒よりも男兒の方に多いのであります。
四、全く注意しないといふものは、極めて少なく、之れは寧ろ性格的に異質な事が原因となつてゐます。

第三節。眞似した形。

之は注意の範圍、(廣さ、行きわたり等の注意の内容)に關する研究であります。

其の一

先づ注意の廣さを得點で表はすこゝを企てました。それには、頭、上體、目の方向、口、右手、左手、脚部、足、が正しく模倣出来れば一點宛、持ち方はその正確さに依つて二點及び三點といふ様に合計十點になる様にしておきまして、採點したのであります。その結果、男、女、長、幼、ご得點の關係は次の様であります。

第五表甲に依りますと男兒よりも、女兒の方が幾分成績がよいのでありますが、併し、男女はその模倣對照が異つてゐるので確かな比較は出来ません。此の外に肖像は全

第五表 (甲) 注意の内容(得點)

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	7.27	6.12	7.66	7.40
平均錯差	1.21	1.42	1.25	1.48

第五表 (乙)

平	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	7.27	5.77	7.34	5.70

を持つ事が見られます。

其の二、

次に注意の集められた個所について整理して見るこゝ、しました。

その結果によりますと、

一、男女共、頭、上體、右手、左手はよく模倣され(九〇%以上)

目の方向、口は中位(七〇%乃至八〇%)

二、脚部及び足は男兒に於ては困難(一〇%乃至三〇%)女兒に於ては中位(五〇%乃至六〇%)之れは模倣對照の相違に依るものと思ひます。

三、道具の持ち方は、大體四〇%乃至五〇%の成績で出

然異つた形をしたものが數名ありまして、それを零點として加へますと、その平均は第五表乙の様になりました男女大體同じになります。

然し何れにしても模倣に於ては幼兒は割合に注意の範圍が廣く十の内六乃至七迄の模倣の正確さ

來ております。

以上を要するに模倣は上半身の方がよく出来、このこころは注意が上半身の方に多く用ひられて、脚部の方は等閑せられてゐるこころを證明してをります。尙換言しますと、人間の表現に於て注意をひくのはかゝる幼児に於ても主として、上半身にある事を知るのであります、そして、よく注意する者のみが脚部、及び道具の持ち方にも氣を用ひる事を示してゐると思ひます。

其三、模倣に於ける左右性。

此の眞似した形から得た興味ある結果として私達は、此の模倣に於ける左右性三次に述べたる非寫生的模倣の二つを擧げることが出来ます。

そのうち、此の左右性と言ひますのは、私達が肖像に對しました場合、肖像を左右性を等しくすれば、持ち物の方向が反對になり、若し持ちものの方向を等しくすれば左右性が反對になるのであります。私達はこの事に注意致しまして、前者を正、後者を鏡映的として整理して見ました。

その結果は第六表の様であります。

此の表に依りますと、私達は幼児が鏡映的模倣をするのが非常に多い事を明らかに知り得るのであります。これは、平常幼児に遊戯等を指導する場合にも充分呑み込んでゐる、指導者はそのつもりで幼児に形を示すべきこころを明

第六表 模倣の左右性

	男		女	
	長	幼	長	幼
正	23	17	22	23
鏡映的	75	78	72	46
其他	2	0	0	31

目に端然と「氣を付け」の姿勢をとり、劍をさるや否や「スラリ」と抜きまして、軽く左右に振り暫く續けたのがありました。

かゝる態度に於て注意を要するこころは、之れは必しも幼児が模倣をせよといふ命令を、はき違へたのではなくして、幼児は目の前にある肖像を模倣しなかつたけれども、何かその肖像に關聯して幼児の心にあつたものをそこに再現し、又はそれを現はそうしたを見るべきものがあります。

即ち劍を振るのは、軍人の勇ましき、嚴肅さ、又は將軍の威厳を自分の心にあつた軍人を再現したものであると見得るのであります。

瞭に教へてゐるものであります。

其の四。模倣に於ける非寫生的な態度

次に此の實驗に於て（第一回第二回を通じて）

「この繪の通り眞似をして御覽。」と言ひましたのに繪はまるで違つた形をした子供が数名ありました。

例をあげて見ますと、男児（年長組）の一人は肖像の前に極めて眞面

第四節。形のくづれ方。

次に幼児が肖像の前で模倣の形を大體備へる又は或形で落ちついた瞬間にストップウオッチをおさへましてそれから十五秒間觀察したのであります。

その間

其の一、始めて動くまでの秒數。

其の二、始めて働かした身體の部分。

其の三、最もよく動いた部分。

其の四、動搖性の度合。(これは動く都度その秒數の所に點をつけたのですが、その點の數によつて判

斷したのであります。)

以上について出来るだけ調査致しました。是等は大體、

注意の持續(長さ)についての研究であります。

其の一は注意の持續時間。

其の二は注意の散る最初の機縁なるころの部分。

其の三は注意の散る時にその最も向き易い方向。

其の四は注意の散る度合。

に就いて、去々研究の手掛りとなるものも存じます。

その結果は次の様であります。

其の一、始めて動くまでの秒數

此の計算に於て十五秒間、動かなかつた幼児は十六秒として計算しました。

第七表 注意の持續 (秒)

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	9.89	9.05	6.14	6.08
平均錯差	5.93	4.95	4.76	4.11

之に依りますと、注意の持續に於ては個人差で非常に大なのであります。が、平均しました所、男兒九秒、女兒六秒、位であります。此處では女兒は男兒に比して注意の持續が非常に短いことが見られます。

其の二、始めて働かした部分

此の結果について大體申しますと、

最初に最も動き易い部分は、眼、口、

手、指であり比較的動きの少ない部分

は、頭、足であります。上體、肩、脚部等は殆んど動かないものであります。

其の三、最もよく動いた部分。

これは大體其の二の結果と一致してゐますから省略いたします。

其の四、動搖性の度合。

この整理では十五秒間一度も動かなかつたものを零點として見ました。

之れに依つて見ますと、男兒は平均三回餘、女兒は平均六回餘り動いた事を示してゐます。矢張り第七表に見たと同じく男兒の方が女兒よりも注意の動搖が大なることが示されてゐると思ひます。

されてゐると思ひます。

第八表 動搖の度合

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	3.38	3.05	6.13	6.64

四 總括

以上、私達は、幼稚園幼児に肖像を模倣させるさいふ一つの極めて具體的な場面に在る實驗をもまゝいたしましたして、幼兒の個性に注意に關する研究を、四節、十項目にわたりまして調査いたしました、それを通じて見ますのに、

其の一、極めて具體的な場面を中心として實驗研究しますことは、極めて困難な仕事ではありますが、之は私共が平生幼兒を保育して行きます上に非常に重要、且、有效であることを知り、又かゝる實驗を通じて思はぬ收穫(例へば、幼兒の特別な個性を發見したり又幼兒の鏡映的模倣の發見)のあることを面白く感じました。

其の二、全般的には、本研究によつて

- I 單獨に一室に呼ばれた時のその個性のあらはれ
- II 模倣をするところの中にあらはれた注意の作用、内容、持續等、幼稚園幼兒の年齢に於ける發達程度、及び男女の差

等を求め、且、理解し得たことを感ずるものであります。

「尙本研究の方法と整理とに關しましては、神戸市立兒童相談所の加藤先生の御指導を得ました事を附加へて置きます。」

フレーベル

倉橋惣三著

岩波書店發行の、大教育家文庫の中の一書である。

この書は、フレーベルを、その教育精神と、その教育的直覺に於て看ようとした。従つて、フレーベルが教育思想家として特色づけられてゐる思想的理論方面に就て多く語らず、又所謂フレーベル正統派から殆んど信條化されてゐる象徴主義的教育方法に對しても、寧ろ批判的態度をなさへ執つた。これは、フレーベルを紹介するとしては忠實でないかも知れないが、この教育的天才を、その眞に尊重すべき所以に於て尊重しなかつた爲である。フレーベルに關しては、既にその主著の好邦譯があり、又、數種の好著作も刊行せられてゐる。わたしは、夫れ等を讀者の前に奨めて、この小篇では、たゞ我觀フレーベルを描くことを宥して貰つた。

以上の序文によつて本書の主旨のあるところがよく諒解されることと思ふ。尙ほ、目を舉げれば次の如し。

- 一、「馬鹿爺さん」
- 二、魚水を得、鳥空に翔ける
- 三、三つの自己教養
- 四、再び教育へ
- 五、「人間教育」
- 六、幼かりし日
- 七、幼兒教育
- (一)キンダーガルテン
- (二)恩物
- 八、女子教育
- (一)母性尊重
- (二)母の歌と愛撫の歌

讀者の参考のために

教 育 (二月號)

教育 二月號は、就學前の教育として特輯せられ、幼兒教育者として關心を持たなければならぬ多くの問題を取り扱つて居られる。御一讀を切にお奨めする次第である。(編輯部)

岩波書店(神田區一ツ橋二ノ三)